【37】

氏　名(国　籍)	金　鍾　具(韓　国)
学位の種類	博　士(都市・地域計画)
学位記番号	博　甲　第　1,788　号
学位授与年月日	平成10年 3 月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	社会工学研究科
学位論文題目	街路景観構成要因と心理評価構造ー多次元尺度構成法とSD法による定量的比較分析
主　査	筑波大学教授　工学博士　大村　謙二郎
副　査	筑波大学教授　工学博士　谷村　秀彦
副　査	筑波大学教授　工学博士　山本　芳嗣
副　査	筑波大学助教授　工学博士　小場瀬　令二
副　査	筑波大学講師　博士(工学)　鈴木　勉

論文の内容の要旨

本論文は，街路景観計画のための基礎的知見として，街路景観を人々がどのように知覚し評価しているかを明らかにするために，多次元尺度構成法と因子分析法という二つの異なる手法を用いて心理的実験を行い，その結果を分析した研究である。全体としては，5章から構成されている。

第1章では，研究の背景と目的を述べ，既往研究のレビューを行っている。

続く第2章では，類似度と選好度を用いた多次元尺度構成法を用いた心理実験の結果を報告している。具体的には，20名の被験者に対して13枚の街路景観のスライドをそれぞれ2枚ずつ提示し，似ている程度を7段階で評価させ，続いて好みの程度を9段階で評価させることによって，分析の基本データとしている。分析の結果，類似度による分析では，「視線誘導性」と「都会性」の2要因が抽出され，選好度による分析では「開放性」，「活動性」，「親近性」の3要因が抽出された。類似度の実験では，街路の物的な形状に着目して判断が行われ，選好度の実験では，街路に対する主観的な好き嫌いが判断されるためにこのような違いが観察されると解釈している。

第3章は，因子分析法による心理実験を行い，その結果を前章で述べた多次元尺度構成法による実験の結果と比較分析している。すなわち，前章で用いられたスライドを含む全部で24枚のスライドを提示して18の形容詞対を用いて7段階でそれぞれのスライドを40名の被験者に評価させている。その結果，「開放性」，「都会性」，「活動性」，「シンボル性」，「親近性」「緑地性」の6因子軸が抽出された。ここに抽出された6因子軸が前章で述べた二つの実験で抽出された要因を概ね包含していることは興味深い。

第4章は，前2章の結果を受けて街路景観の物的な構成要素と心理評価との関係を分析している。すなわち，因子分析のためのスライドと同じものを提示して，それぞれのスライドの中から「印象に残った構成要素」を限定リストの中から選択させ，その選択頻度を因子分析において得られた各々のスライドの因子得点に回帰させている。この結果，特定の因子軸の因子得点と建物，看板，水面などのような景観の構成要素との間に有意の関係があることが示された。

第5章では，以上の分析の結果をまとめて結論を述べている。すなわち，街路景観を対象として多次元尺度構成法と因子分析法という二つの異なる手法を使って数量的な分析を著者が初めて行ったこと，その結果，類似度と選好度という二つの判断基準を用いる多次元尺度構成法による要因が因子分析法によって得られた因子軸に包

含されること，心理評価と景観の特定の構成要素との間に有意の関係があることが定量的に明らかになったことなどが述べられている。また，形容詞対を用いる実験法は言語に大きく依存するが，類似度と選好度を用いる方法は言語に依存せずに実験を行える可能性を持っているので，異文化間の街路景観分析に対して有効な手法であろうと示唆している。以上が本論文の概要である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

多次元尺度構成法，因子分析法はこれまでにもいろいろと研究に用いられているが，街路景観を対象としてこの二つの手法を適用して，その結果を比較したところにこの研究の独自性があると言えよう。特に，類似度と選好度という二つの実験を組み合わせることによって，因子分析法による因子軸に包含される次元を抽出したことは興味深い。しかし，なぜ，そのような結果が得られたのかについての深い考察は行われていない。また，この二つの手法を組み合わせることによって，異文化間の街路景観評価の違いを定量的に分析できるのではないかという示唆も興味深いが，本論文においては単なる示唆に止まっている。また，多次元尺度構成法による実験と因子分析法による実験に用いられたスライドとそれぞれの被験者は全く同一ではなく，このことが結論にどのような影響を与えるかに関する吟味が十分とは言えない。

このように，本論文に提示された示唆の検証は今後の研究に待たねばならないところが少なくないが，ここに示された知見は興味深くかつ有用であり，一定の水準に達している研究として評価することができる。街路景観という計量的に扱うことが困難な事象を対象として良く管理された心理実験を行い，定量的な統計手法を適用して意味のある結論を導いたことは著者の研究者としての力量を示していると認めて良い。

よって，著者は博士（都市・地域計画）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。